

一八八三年九月二十二日(土)

アダル氏の邸宅における聖ラーマクリシユナとラカール、イシヤンなどの信者たち

〔子供の信じ方——アンツチヤル賤民とシヤンカラアヤチャリヤ大師——サドク修道者の胸〕

タクール、聖ラーマクリシユナはカルカッタのアダルの家を訪問なさった。タクールはアダル家の応接間に坐っていらつしやる。午後であつた。ラカール、アダル、校長、(原典註)イシヤンはじめ、大勢の信者たちと近所の人々が来ている。

イシヤン・ムコパツダエ氏を、タクールは好いていらつしやつた。彼は政府の経理局長を務めていたが、定年後は慈善活動や瞑想などもつばら宗教的なことに日を送り、時々タクールにお会いしていた。メチュアバザル街の彼の邸で、タクールは以前にも、ナレンドラほか信者たちといつしよに食事をなさつたりして、殆ど一日中いらつしやつた。今日、イシヤンは、大勢の人を連れてきていた。

ナレンドラさんは見えるということだったが、都合ができて来られないらしい。イシヤンは定年後、タクールにお会いするためドマキネンシヨル南神村にしばしば行つたり、バトバラドマキネンシヨル(南神村の北約25哩)あたりのガンガールの堤防をひとりでそぞろ歩きながら、神について想っていた。最近、バトバラでガーヤトリー・マントラを称えるプラスチックアラナの修行をしたいという希望を持っていた。

今日は土曜日、九月二十二日アッシン六日。キリスト暦一八八三年。

聖ラーマクリシュナ「(イシヤンに向かつて) あんた、あの話をしてごらんよ。子供が手紙を出したという、あの話」

イシヤン「はっはっはっは——。一人の男の子が、自分たちを創って下すつたのは神様だという話を聞いて、神様に手紙を書いてポストに入れました。宛名に『天国』と書いて——」(一同笑う)

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ。わかったかい！ この男の子のように信じることだ。そうすれば成功するよ。イシヤン、それから、あの行事を捨てる話は？」

イシヤン「至聖をつかんだならば、決まり通りの礼拝勤行のようなものは脱落してしまいます。ガ

(原典註1) イシヤンの息子たちは皆、高い教育を受けた。長男のゴパールは地方長官になった。中のサティシユ・チャンドラは地方判事になった。サティシユはナレンドラの級友で、バカワジ(画面太鼓の名演奏家であった。彼はガジプールの地方政府に勤めていた。ナレンドラが遊行している時分には、時々そこへ滞在していた。ナレンドラがバオハリ・ババに会ったのもそのころである。兄弟のなかの一人ギリシユ氏は、カルカッタ大学で登記補佐官として長い間実務に携わっていた。イシヤンはあまり慈善活動をしすぎて、終いには大きな負債で財政困難に陥った。彼は自分の死より長年前に妻を亡くしていた。イシヤンはバトバラへしばしば行つては独りで修行していた。

(原典註2) The kingdom of heaven is revealed unto babes, but is hidden from the wise and the prudent—Bible. (天の主である父よ、あなたは、これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました) —— マタイによる福音書11章25節 ——

ンジスの堤で大勢が定時のお勤めをしていましたところ、一人の人物がしないで見ているのです。誰かがわけをたずねると、彼はこう答えました。『私はいまアシヨウチャなのでお勤めはいたしません。死のアシヨウチャ、誕生のアシヨウチャ、二つともかかっているのです。無明無知の母が死んで、常楽の魂が生まれたのです』と〔訳註、アシヨウチャ——血族の誕生、または死による一時的な穢れ。この場合は勤行は出来ない〕

聖ラーマクリシユナ「それから、真我の智識を獲たらカーストの差別はなくなる、あの話は？」

イシャン「カーシーで、ガンジス河の沐浴を終えたシャンカラ大師が石段を上がって行かれた——そのとき目の前に大を何匹もつれた賤民が突然あらわれたのです。シャンカラ大師は反射的に、

『下郎、けがらわしくも、このわたしに触れたな！』とおっしゃいました。すると、その賤民は申しました。『タクル、あなた様は私に触られはいたしません。——私もあなた様に触つたりはいたしません。真実の自我はすべての人間の内なる支配者で、何かに汚されるようなものではありません。酒に映つた太陽の影と、ガンジス河に映る太陽と、どこがどうちがうのですか？』と

聖ラーマクリシユナ「はっはっは。それから、あの大調和の話は？ いろいろな方法であの御方がつかめるといふ話は？」

イシャン「ははは、ハリとハラは同じ語源から生まれたもので、信じるものが違うだけなのです。ハリである御方がハラでもあられるのです。信じるのが何より大切なのでございます」〔訳註、ハリとハラは同じ語源 田五からなる神の二つの表現で、それをクリシユナ ヌヴィシユヌ神と見る時にはハリと呼び、シヴァと見る時にはハラと呼ぶ〕

聖ラーマクリシユナ「ハッハッ、それからあの話——修道者の胸があらゆるものより大きいという話」
イシャン「はははは。ハイ、すべて地上のものなかで一番大きいのは大地。それより大きいのが海。それより大きいのが大空。しかし、至聖ヴィシユヌは片足で、天国と地球と地獄の三界を支配しておられます。そのヴィシユヌの御足が修道者の胸の内に入っているのですから、だから、修道者の胸はあらゆるものの中で一番大きいのでございます」

この問答を聞いて、信者たちは大喜びである。

根元造化力の礼拝こそブラフマンの礼拝——ブラフマンとシヤクティは不異

〔無相の神と創造・維持・破壊を司る神は不異〕

イシャンはバトバラで、ガーヤトリ・マントラを称えるブラスチャラナの修行をするつもりである。ガーヤトリ・マントラとはブラフマンのマントラである。完全に世間知をなくさなければブラフマン智は生じない。しかし、この末世の現代においては、生命が食物なしには存在できないので、

（原典註3）——マイトリ・ウパニシャッド第二章——

（原典註4）真のヨーギーは万物のなかに自己を見、また自己のなかに万物を見る

まことに真理を覚った人は、あらゆるところを同等に見る——ギター6・29——

（原典註5）ブリターの息子よ、すべての人々は、様々な方角から、わたしへの道を進んでいる

——ギター4・11——

どうしても世間知というものが無くならないのだ！色、味、香、触、音、こういう対象ものに、心は常にとらえられているのだから、(原典註)聖ラーマクリシユナは、現代は、ヴェーダの時代のようにはいかないとおっしゃるのだ。ブラフマンである御方が、シャクテイ(力・大実母)なのである。シャクテイを拜むことがブラフマンを拜むことになるのだ。あの御方が、創造、維持、破壊をなさるとき、シャクテイとお呼びするのだ。二つは異なるモノではない——一つのモノなのであると。(訳註、ガーヤत्री・マントラ——ヒンドゥー教徒の男子が聖糸をつけた後に、一日に三回称えるヴェーダの聖句)

〔絶対不変なるものの探究とイシヤン、ヴェーダーンタ派の態度——我こそかのブラフマンなり〕
——ソーハム

聖ラーマクリシユナ、イシヤンに向かって——

「なぜ、ネーテイ、ネーテイ(これでもない、これでもない)なんてばかり言つてうろついているんだい？
ブラフマンについて何一つ説明することは出来ないよ。ただ、(原典註)実在そのもの(原典註)と云えるだけだ。ただ、ラーマだけだ。

わたしが見たり考えたりすることはみんな、あの根元造化力アディヤシャクテイの、あの造化力意識のすばらしい顕れなんだよ。——造る、保つ、壊す。生物世界、それに瞑想と瞑想する人、信仰、愛、すべてあの御方の力の表現だ。

だが、ブラフマンとシャクテイ(力)は同じものだよ。ランカーから戻ってきたあと、ハヌマーンは

ラーマを讀えてこう言った——『おお、ラーマよ、あなたこそ至高なるブラフマン。そして、妃シーターはあなたのシヤクテイです。でも、あなた方二人は同じものです』と。ちょうど蛇と蛇行の關係で——蛇のように曲りくねった動きを考えると、どうしても蛇のことを考える。蛇のことを考えると、蛇のような動きもいっしょに考えてしまう。牛乳を考えると牛乳の色を考えると——白色を。牛乳のような白さといえはすぐ牛乳を考えてしまう。水の冷やす力を考えれば水のことを考えるし、水を考えれば水の冷やす力のことを考える。

この根元造化力、または、大現象がブラフマンを覆っている。この覆いの幕が除れてはじめて、永遠に実在り通しの我だ。わたしはあなた、あなたはわたしだ！

聖ラーマクリシュナ「この覆いの幕が残っている間は、ヴェーダーンタ派の決まり文句——つまり、我こそ、かのブラフマンである。などと口にするのは正しい態度ではないんだよ。波は水のものだが、

（原典註6）至上者の非人格的な相 即ち非顯現の真理に 心をよせる者たちの進歩は甚だ困難である
肉体をもつ者たちにとつて その道は常に険しく様々な困難を伴う —— ギーター 12・5 ——

（原典註7）彼は語を以ても、意を以ても到達し得ず、まして眼を以てをや、ただ「彼は、実在す」と語る師につくに
あらずんば、いづくんぞ彼を認識し得ん？

彼はまた兩者（対象と自我が真性となることによりて、「彼は、実在す」と認識せられざるべからず。
一旦「彼は実在す」と認得せる時、人の真性は清澄となる。

—— カタ・ウパニシャッド第2篇 2・3・12〜13 ——

何で水が波のものであるもんか。まだ幕がかかっている間は、母親——大実母と呼ぶのがいい。あなた(神)は母親、私はあなたの子供。あなたは御主人、私はあなたの召使い。この主人と召使いの考え方もとてもいいよ。この召使いという考え方から、ほかのいろんな思い方が出てくる。静かで平安な態度や、友達関係と見る態度も——。主人が召使いを可愛がつていけば、「これ、私の傍にきてお坐り、お前と私は一心同体だよ」と言ってくれることもあるさ。けれども、召使いが自分勝手に主人のそばへきて坐りこめば、主人は怒るだろう?」

〔根元造化力と神の化身の活動とイシヤン——マヤーとは何? ヴエーダ、ブラーナ、タントラ〕
 の調和

「神の化身の活動——これもみんな、造化意識の力の表れだ。ブラフマンである御方がラーマであり、クリシユナであり、シヴァなのだ」

イシヤン「ハリとハラは一つの語源から出て、ただ枝先が分かれて語尾が違っているだけでございます」(一同笑う)

聖ラーマクリシユナ「うん、一だけで、二はないんだ。ヴエーダではそれを、『オーム・サッチダーナンダ・ブラフマン』と言ひ、ブラーナでは、『オーム・サッチダーナンダ・クリシユナ』と言ひ、それからタントラでは、『オーム・サッチダーナンダ・シヴァ』と呼んでいる。

その造化の心の力が大現象の相をとつて、一切を無智にしているのだ。アディヤートマ・ラーマ—

ヤナにあるが、ラーマに会った見神者^シたちはこう言ったものだよ——『おお、ラーマよ、君の世にも魅惑的なマーヤーに、我々を引き込まないでほしい！』(原典註8)

イシャン「そのマーヤーとは何でございませうか？」

聖ラーマクリシュナ「見たり、聞いたり、考えたりすることは、何でも皆マーヤーだよ。一言でいえば、女と金こそマーヤーの幕だ。

パーン(キンマの葉とびんろうじゅの実でできたチューインガムのように噛んで楽しむもの)を噛んだり、魚を食べたり、タバコを吸ったり、油を体に塗ったり、こういうことをしたって何の差し支えもない。そんなことを捨てたって何にも効能はないよ。女と金を捨てる必要なんだ。それを捨てるのがほんとの離欲だ！ 在家の人は、時々、独り静かな処で靈の修行をして、信仰をわがものにして、心で捨てるんだよ。出家修道者は外側で捨てるのと心で捨てるのと、両方捨てるだろうがね」

〔ケーシヤブ・チャンドラ・センと捨離——新摂理^{ナビダリ}と実在無相論者——教条主義^{ドクマチズム}〕

聖ラーマクリシュナ「ケーシヤブ・センに言ったことだが——水差しと漬物壺を置いてある部屋

(原典註8) 罪深い行いをする者もあり 徳高く善き行いのみする者もあるが

ウツイ 大靈はそのどちらにも動かされない だが生物は無知のため迷い苦しむ —— ギーター 5・15 ——

トリクダ この三性質から成るわたしの幻象に うち勝つことは大そう難しい —— ギーター 7・14 ——

にチフス患者をいれたら、決して良くなりっこないだろうと。時々、独りで静かなところに行かなくちゃいけない」

一人の信者「先生、^{ナバビズム}新摂理(ケーシヤブ・センが新しくはじめた宗教団体)はどんなものでしょうか。何だかゴツタ煮汁のような感じですが——」

聖ラーマクリシユナ「近代的だという人もあるよ。ブラフマンを学んでいる人たちの神様は、わたしらのは別の神様なのかな? 新摂理——つまり、新しい法則か。そりゃそうかも知れんが——。六つの見方がある——六派哲学というが、きつとその中のどれかのようなものかもしれない。

だが、神は無相だと言ひ張る人たちは、どこが間違っているかわかるかい? 『あの御方は形がないので、その他の考えは間違いだ』と言っているところが間違いなんだ。

わたしには、あの御方が形を持っていて、また無形でもある、その両方だ^(原典註9)ということがわかってる。あの御方は数えきれないもの、ありとあらゆるものにお成りになるんだよ^(原典註9)」

〔^{アンカウチケル}賤民にも神は宿っている〕

聖ラーマクリシユナ、イシヤンに向かつて——

「^{チフトシヤクテイ}その心の力、その大現象力が二十四の存在原理^(原典註10)になつていらつしやる。わたしがいつか瞑想していたら、心がさまよい出て、ラシツク^(訳註)の家に行つてしまつた! ラシツクは掃除夫だ。わたしは自分の心に、『このウスノロ、ここに居る』と言いきかせた。大実母^マが見せて下さつたんだよ。——あの家

の人たちは仮にあんな状態で遊んでいるだけで、あの人たちの中にもちゃんとクンダリニーがあり、六つのチャクラもあるんだ、と！

あの根元造化力は女か男か？ わたしは郷里くりにで見たことだが、ラハの家でカーリー祭りがあった。大実母マのくびに聖系マがかけてあった。お参りに来た一人が、『どうしてマリーのくびに聖系をかけるんですか？』と聞いた。すると、この家の主人はこう答えたよ。『君！ きみはマリーのことをよく知っているらしいね。だが私は、マリーが男だか女だか、さっぱりわかっていないんだよ』と。(原典註1)

(原典註9) いままで君に話したことは、わたしの無限の力と相あひまの一部にすぎない —— ギーター 10・40 ——
(原典註10) 五大要素(地水火風虚空) 我念アジカガ、理解力 氣未発キミハツの活力 十根(五官の受動面) 心 五官の対象(色声香味触)

—— ギーター 13・6 —— (巻末の解説 二十四の存在原理 参照のこと)

(訳註) 南 神寺院の北東400mの所にラシックという人が住んでいた。彼は掃除夫として寺院の掃除をしていた。彼は賤民のために寺院で自身の姿を見せることは出来ず、聖ラーマクリシュナの許を訪れる信者たちを遠目に眺めていたが、日に日にラーマクリシュナへの信愛あひまが深まり、ある日、ラーマクリシュナがジャウ樹台ジャウに用足しに行った時、勇気を出してラーマクリシュナの御足に全身を投げ出して礼拝した。驚いたラーマクリシュナはそのまま三昧サマディに入られたが、平常を取り戻した時、『お前が肉体を離れるときに会いに来るよ』と言ってラシックを祝福した。ラーマクリシュナが捨身された二年後、ラシックは病氣になり、最期を迎えようとしたとき、「ついに来て下さったのですね！ ああ、何て美しいんだろう！ 何て荘厳な光なんだろう！」こう言って彼は目を閉じて永遠の眠りについたのです。またラーマクリシュナはご自分の修行時代、皆が寝静まった夜、一人でラシックの家に行き、ラシックの家の汚れをご自分の髪で拭いて、ご自身のバラモン階級としての誇りをぬぐい去ったのです。

あの^{マハイマイヤ}大現象力が、シヴァ大神をゴクリと呑み込んでしまったとも言われているね。マーの中の六つのチャクラが目覚めて、シヴァはマーの太ももから出ていらつしやつたと。そのときシヴァは、タントラをお創^{はじ}めになったのだ。

その心の力、その^{マハイマイヤ}大現象力にすべて委^{シヤラナーガタ}ねなけりや」(訳註、シヤラナーガタ——全託、すべてを委^{ゆた}ねる、自身を明け渡すという意味で、聖ラーマクリシュナがよく使う大切な言葉)

「イシャン」どうぞ、あなた様のお恵みをただかせて下さいませ」

「イシャンへの教え——深く潜れ——グルは必要か?——バラモン学者——經典とイシャン」
——本を読んでも何の役にも立たない

聖ラーマクリシュナ「素直な気持ちで頼め——ねえ、神様、会つて下さい。そして、心から泣け。それから、こうお願いしろ——神様、女と金から心を引き離して下さい!

それから、深く潜ることだ。上の方に浮かんでバシャバシャ泳いでいたんでは、真珠は採^とれないだろう? 深く潜らなくてはだめだよ。

師匠^{グル}から在り場所を教えてもらうこと。ある人がヴァナリンガ(自然に出来た石のシヴァリンガ)を探していた。誰かがこう言ってくれた——これこれの川の堤をずっと進んでいくと一本の樹がある。その樹のそばに水が渦を巻いているから、その場所を目がけて潜れば探しているものが見つかるだろうと。こんなふうに、グルに肝心な場所を教えてもらうことだ」

イシャン「はい、おっしゃる通りでございます」

聖ラーマクリシユナ「サツチダーナンタが師匠(グル)になつて顕(グル)われているんだよ。師匠のところへ弟子入りしても、師匠をただの人間だなどと思つていると何も進歩しないよ。その御方を神の化身だと思つてこそ、授けられた真言(マシユ)を固く信じていることができるだろう？ 信じてことさえてできれば、すべては成就するんだよ！ シユードラ階級だったエーカラヴィヤは、土でドローナの像をつくつて、森で弓術の修業をした。土のドローナを拜んでは、それをホンモノのドローナ大先生だと思つて——。そうやってこそ弓術の達人になれたのだ。(訳註、ドローナ——「マハーバーラタ」に登場する弓の達人)

それから、あんた、バラモンの学者とあんまり親しく付き合つてはいけないよ。あいつらは、パイサ銅貨を二つもらうことばかり考えているんだ！

わたしは見たが、バラモンが厄除けまじないをするために聖典(チャンディ)を誦(あ)讀(う)げていた。見ていたら、半分読まないでページをめくつている(一同笑う)。

自分を殺すためなら爪切り一つあればいい。他人を殺すのなら剣や盾も要る——お経や聖典はその

(原典註11) さてまた、ガールギー女史、この不滅なものは他から見られざる見者(ミ)であり、聴かれざる聴者(キ)であり、意(おも)われざる意者(おも)であり、識(し)られざる識者(し)である。しかも、この者より他には見者もなく、聴者もなく、意者もなく、識者もありません。まことにこの不滅なものの上に、ガールギー女史、虚空は織り込まれ、織り出されているのです。

—— プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド 3・8・11 ——

(原典註12) あなたは全宇宙の万生万有の御父 すべてのが拝み従う無上の導師 —— ギーター 11・43 ——

ためのもの。

いろいろな経典を研究する必要は何一つないよ。(直典註)もし識別力(ヴァイブエカ)がなかったら、ただ学問ばかりしていても何にもならない。六派哲学の本をみんな読んだって、何の役にも立たない。静かな処で独りひそかに、泣いて、泣いて、あの御方を呼べば、あの御方が何もかも心得てして下さる」

〔秘ひそかな修行——病的なきれいきとイシャン〕

イシャンはバトバラで特別な靈の修行をするために、ガンジス河畔に小屋を建てている。そのことをタクルは聞き知っておられた。

聖ラーマクリシュナは熱心な様子でイシャンにおっしゃる——

「そうそう、例の小屋は出来上がったかい？ 知っているかね、こういうことは人に知られないほどいいんだよ。サットヴァ性の人は、家の片隅とか森のなかで瞑想しようと思ふものだ。時には蚊帳かやのなかで瞑想したりね！」

イシャンは時々、ハズラー氏をバトバラへ招いていた。ハズラー氏は病的なきれいきであった。タクル、聖ラーマクリシュナは、その癖を戒めておられた。

聖ラーマクリシュナ、イシャンに向かつて——

「それからね、あんまりこだわり過ぎるのはよくない。一人の修行者サドックがおそろしく喉が渴いてしまった。皮袋の水入れて水を運んでいた人が、その修行者に水をあげようとした。すると修行者は、『お

1883年9月22日(土)

朝、昼、晩にカーリーを呼べば
祈^{いのり}禱^{つとめ}も勤^{つとめ}行^{つとめ}も要^{つとめ}りはせぬ
勤^{つとめ}行^{つとめ}はあなたのそばまでいくが
決していつしよになりはせぬ

慈^{あま}善^な、祈^{いのり}願^{ねが}、賜^{たま}りもの

そんなものには目もくれず

この世の愛をひとまとめ

大^か実^み母^はのみ足^あに捧^たげよう

カーリーの御名の不思議な力

それは誰にもわからない

神のなかの大神シヴァさえも

御^ご名^なの光^{ひかり}栄^{さか}をほめ讃^{ほめ}えます

イシャンは黙^{もく}りこくって聞いていた。

「イシャンへの教え——子供のように信じること——ジャンカのように先ず修行をしてから世俗で神をさるとる

聖ラーマクリシュナはまた、イシャンに向かっておっしゃる。

「ほかに何か腑に落ちないことがあったら、どんどん質問しなさいよ！」

イシャン「はあ、信じるということについておっしゃっておられましたか——」

聖ラーマクリシュナ「正しく信じることによって、あの御方がつかめるんだよ。好き嫌いで、素直に神さまのことは何でも信じられたら早く成功する。飼葉の選り好みをする牝牛は乳が少ししか出ない。どんな飼葉でもどんどん食べる牝牛は乳がドクドク出るよ。

ラージクリシュナ・バルシヨの息子が話してくれたんだが、ある人が——「この羊がおまえの守り神だぞ」と言われて、素直にそのまま信じていたそうさ。あらゆるものの中にあの御方はいらつしやるのだからね。

師匠が信者に教えて下すつた。あらゆる生きもののなかにラーマが住んでいらつしやる。まあ、その信者はそっくりそのまま信じ込んでしまつて！ 犬ころがルチをくわえて逃げていったら、信者はバターの壺を持つて後から追っかけて、『ラーマ、ちよつとお待ち、そのルチにはバターが塗つてないんだよ！』と言つたとさ。

そうさ、そうさ、クリシュナキシヨルのあの信念！ 『オーム・クリシュナ！ オーム・ラーマ！ このマントラを称えたら、百万遍勤行をしたのと同じだ』と言つていた。

そのうえ、わたしにクリシュナキシヨルはコッソリと言ったよ。『誰にも言わんで下さい。実は、私は朝夕の勤行おつゝみたいなもの、どうも好きじゃないんです!』とね。

わたしもそんなふうになるよ! 大実母マは悟らせて下さるんだ。マー自らがすべてに成っていらつしやることをね。用を足し終わつて松林から五聖樹パンチャバテイの杜の方に歩いてみると、犬が一匹ついてきた。わたしは五聖樹パンチャバテイの杜のところにしばらくの間立っていたよ。マーが犬を通じて何をおっしゃるのかと思つてね! だから、あんたの言つたその信念で、すべてのことはうまくゆくよ(原典註15)」

〔在家者の障害と神の恵み〕

イシャン「私は、でも、在家のものですから——」

聖ラーマクリシュナ「それがどうしたい。あの御方のお恵みで、出来ないことも出来るようになる(原典註16)。ラーンプラサードは、この世は幻影まぼろしの幕と歌にうたったが、それにある人が答えて別な詩をつくつた——

この世は楽しい遊び小屋

私は食べたり飲んだりしながら

愉快に遊んで暮らしていく

ジャナカ王は偉大なお方

不足のものとて何もなく

こちらもちらもしつかり保ちも

コップにあふれるミルクを飲んでいた

こちら——この世の幸、あちら——靈性

先ずはじめに、静かな処で独りひそかに靈の修行をして、神様をしつかり掴んでから世間に出て住めば、ジャナカ王のようになれるということだ。そうでなければ、どうしてこんな具合にいくものかね？

ご覧、カルテイカにガネーシャにラクシュミーにサラスワテイと、あらゆるもの持っているシヴァ大神でさえ、時々三昧に入ったり、ラーマ、ラーマと言いながら踊りを踊るじゃないか！」（訳註、カルテイカ、ガネーシャ——ドウルガーの息子。ラクシュミー、サラスワテイ——ドウルガーの娘）

（原典註15）あらゆる宗教の形式を斥けて ただわたしを頼り 服従せよ

わたしがつべての悪業報から君を救う 怖れることは何もないのだ ——ギター 18・66 ——

（原典註16） With man is impossible, but nothing is impossible with the Lord —— Christ.

（人間にはできないことも、神にはできる） —— ルカによる福音書 18章27節 ——